

## 海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	内田 真介	印
所属機関	国立がんセンター中央病院 呼吸器外科	
・参加した国際学会・会議名	名称: IASLC 19th World Conference on Lung Cancer (世界肺癌学会) 開催日: September 23-26, 2018 開催地: Toronto, Canada	
渡航期間	自 September 23, 2018 至 September 27, 2018	
・研究内容 ・国際学会・会議内容	Potential predictors of unexpected readmission after lung resection (肺癌術後予期せぬ再入院を要する患者の予測因子とは?)	
研究成果 (要約: 800字)		
<p>この度, 世界肺癌学会で「Potential predictors of unexpected readmission after lung resection (肺癌術後予期せぬ再入院を要する患者の予測因子とは?)」について発表し, 世界の肺癌研究者と討論する機会を得ることが出来た. 本国際学会は, 肺癌における WHO 分類の改定に関わっており, 最新の知見や臨床試験の結果など多くの重要な研究結果が発表された. 今回, 国立がん研究センター中央病院における肺癌切除の周術期成績および術後再入院の危険因子を明らかにした貴重な研究発表を行った.</p> <p>2016-17年までの当院の連続した原発性肺癌切除例 1000 例を対象とし, 「予期せぬ再入院」を退院後 30 日以内の予定外の緊急入院と定義し, 再入院群と非再入院群で術前因子, 術中因子, 術後因子に関して比較検討した. 肺瘻閉鎖術を要した例や術後 5 日以上遷延した肺瘻例を難治性肺瘻と定義した. 術後在院日数中央値 4 日 (2-117). 合併症 116 例 (11.6%), 30 日死亡 3 例 (0.3%) であった. 43 例 (4.3%) が予期せぬ再入院を要した. 再入院理由としては膿胸・胸膜炎 11 例と最も多く, 再入院後 4 例 (9.3%) が死亡し, 全例に経過中間質性肺炎の急性増悪を認めた. 男性, 喫煙, 糖尿病, cN1/2, 葉切以上の術式, 難治性肺瘻例で有意に再入院率が高く, 再入院群では有意に腫瘍径が大きく, 手術時間が長く, 術後在院日数が長かった. 多変量解析では難治性肺瘻が再入院の予測因子であった. 難治性肺瘻が再入院の最も重要な予測因子であり外科医としては術中の肺瘻予防および修復が大事であると再認識する結論であったと報告した. 海外の研究者の反応としては, 当院の周術期合併症および死亡率の低さ, 再入院率の低さについて感心され, 主に周術期管理について議論した.</p> <p>以上, 貴重な研究結果を国際学会で報告することが出来, 非常に有意義な経験となった. 本発表は, 今後論文としてまとめ投稿する予定である.</p>		